

診療室二年

いつもならこの時刻、診療室の窓の外は傾いた夕陽に照らされて、隣家の竹藪や柿の若葉が黄金色に輝くの、今日はそのあたりはもう樹の下間になっています。僅かに水色に明るく空には南西から東北にただならぬ速度でねずみ色に雲が走っています。

時折、突風の塊が四階建てのこの建物にどうとぶつかるといつか配があつて、その度に窓ガラスに細かい雨滴が吹き付けられます。温暖前線の通過です。

部屋の隅やら机の下の足許はもう暗くなつていたので、診察机の前にあるシャウカステンの白色蛍光灯が眩しい程明るく感じられます。

先刻現像の出来た注腸造影のフィルムをKさんに見せて説明しているうちに五時になりました。大いに注意を要するような病変の無いことは、撮影中に透視しながら既に見ているのでお互いに緊張はありません。小医院を開業して二年と二ヶ月になりますが、今までに肺癌二例、肝癌一例、胃癌六例を見つけました。大腸癌はまだありません。胃癌よりは多くなりつつあるといえますから、頻度から言えばそろそろ遭遇しそうですが、Kさんはそうではありませんでした。

天候のせいでは朝から患者が少なく、一日で二九人でした。五月の平均が四四・七人だったので、二九人というと、とてもものんびりしていて雑談しながらでもゆったりと診療出来ます。これで経営が成り立っていけばほんとに有難いのですが、この数字では残念ながらそうはいきません。忙しすぎるのは困りますが暇なのはもっと困ります。

でも、一日平均四十五人の患者さんが来てくれればまあなんとかやっていけるようです。ばたばたしても仕方がありません、落ち着いてやりましょう。

鍵を閉めて帰宅する道すがら西の空を見ると、巨大な山脈の様に真っ黒い雲が連なつた向こう側に、微かに真紅の夕焼けの名残が映えていました。